「家畜改良増殖目標」及び「鶏の改良増殖目標」のポイント

平成２７年３月

農林水産省畜産部

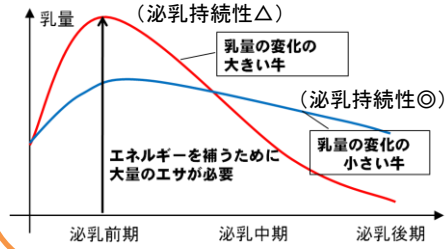
新たな家畜改良増殖目標と鶏の改良増殖目標

平成27年3月

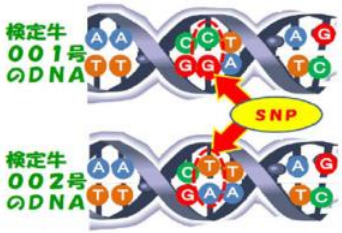
○ 10年後（平成37年度）を目指して、「食卓（消費者）」と「農場（生産者）」を結びつけ国産畜産物への理解の増進に努めるとともに、消費者の多様なニーズに応えて、手頃で品質が高く、また、特色のある畜産物を供給できる家畜づくりを進めます。
○ 併せて、新たな技術を取り入れながら、家畜の能力と生産性を最大限に発揮し、我が国の強みを活かした畜産物づくりを支えます。

農家の経営を支える長命で生産性の高い家畜づくりを進めます。

- 体の負担が少なくエサも節約できる泌乳持続性の高い牛づくりを進めます（乳用牛）。

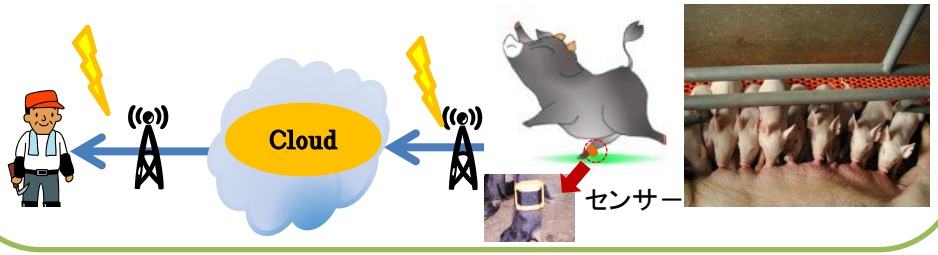


- 遺伝子レベルで能力を解析し、家畜の改良を加速化させます。



飼養管理の高度化等により、繁殖性や飼料効率の向上を図り、家畜の能力を最大限に発揮させます。

- 家畜の能力を十分に発揮させるため、ICT（情報通信技術）などの新技術を活用した繁殖管理の徹底を図るとともに、家畜の快適性に配慮した飼養管理（アニマルウエルフェア）などの取組を進めます。
- 豚の年間離乳頭数の向上や牛の分べん間隔の短縮を図ります。



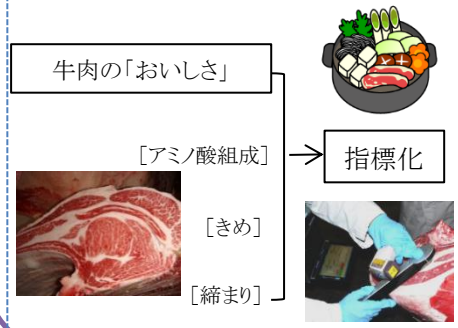
多様な消費者ニーズに応える品質の高い畜産物を提供できる家畜づくりを進めます。

- 早期に十分な体重に達し、適度な脂肪交雑が入る和牛をつくりながら、肥育期間の短縮を図ります（肉用牛）。

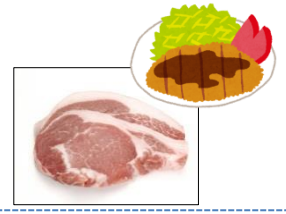
- 特色ある畜産物づくりや生産コストの低減を図るため、我が国特有の資源である飼料用米やエコフィード、放牧などの積極的な利活用を進めます。

我が国の強みを活かした特色ある畜産物づくりを支えます。

- 「オレイン酸」や「アミノ酸」などの「おいしさ」の指標化を進めます。



- ロース芯筋内脂肪含量を高めるなど、差別化が図られるおいしい豚肉づくりを進めます。



- 国産鶏種を軸に、地域の特色ある地鶏等の鶏肉づくりを進めます。

家畜と鶏の増殖目標

【乳用牛】

- 我が国の乳用牛改良基盤を維持するとともに、牛乳・乳製品の安定的な供給を確保し、牛乳・乳製品の需要動向に即した生産を行うことを旨として飼養頭数を設定。

総頭数	133万頭（現在140万頭）
うち2歳以上の雌牛	92万頭（現在 96万頭）

【肉用牛】

- 牛肉の需要動向に即した生産を行うことを旨として、飼養頭数を設定。特に、遺伝的能力評価に基づく優良な繁殖雌牛の増頭を図るとともに、乳用後継牛の不足を生じさせない範囲内で、体外・体内受精卵移植技術を活用した和子牛の生産拡大を推進する。

総頭数	252万頭（現在257万頭）
うち肉専用種	186万頭（現在172万頭）
うち乳用種・交雑種	65万頭（現在 85万頭）

【豚】

- 豚肉の需給動向に即した生産を行うことを旨とした飼養頭数を設定。

総頭数	905万頭（現在954万頭）

【馬】

- 利用目的ごとの需要動向に応じた頭数となるよう努めるものとする。

【めん羊】

- 需要動向に応じた頭数となるよう努めるものとする。

【山羊】

- 乳用、肉用それぞれの需要動向に応じた頭数となるよう努めるものとする。

【鶏】

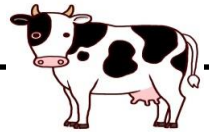
- 鶏卵・鶏肉の需要動向に即した生産を行う旨として飼養羽数を設定。

卵用鶏	167百万羽（現在175百万羽）
肉用鶏	135百万羽（現在136百万羽）

乳用牛の改良増殖目標　－ 10年後を目指して　強健で長命な牛づくりを加速化させます－

「農場から食卓まで」を支える乳牛づくり

- 消費者に国産の牛乳・乳製品を安定供給できる生乳の生産を支えます。
- 強健で長命な牛づくりを進め、酪農経営における生産コストの低減を促進します。
- 牛群検定（※）の拡大などを通じ、乳用牛の能力発揮を促します。

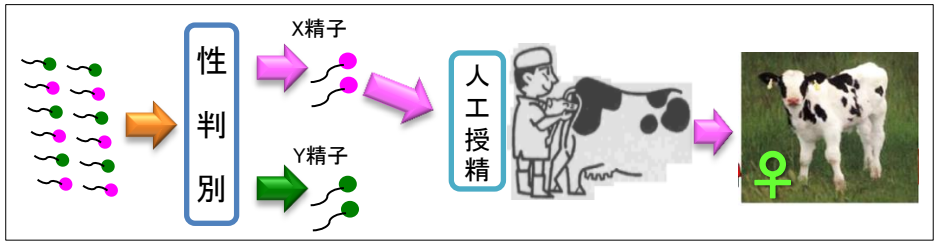


生乳の安定供給を支える酪農家を応援します。

優良後継牛の効率的な確保

多様な乳製品の供給源の確保

・性判別などの新たな技術を活用し、効率的に優良な後継牛を確保することにより、生乳を安定供給し、豊かな食生活と酪農家を応援します。



乳用牛の能力を高め、それを最大限に発揮できる牛づくりを目指します。

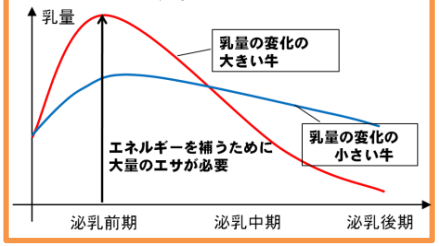
牛乳・乳製品は、良質なタンパク質やカルシウムなど各種栄養素に富み機能性の面でも優れた食品です。今後も、乳用牛の能力を高め、生涯生産性の向上を進めます。

- 牛乳・乳製品の1人当たり年間消費量は89kg、チーズなどは、まだまだ伸びる余地があります。
- 我が国では牛乳を100%自給しています。牛乳・乳製品全体の自給率は64%です。

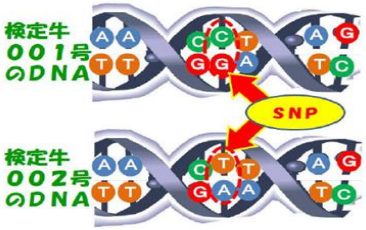
乳用牛の能力を十分に発揮させるため、新技術を活用したきめ細かい個体管理や家畜の快適性に配慮した飼養管理（アニマルウエルフェア）などの取組が重要です。

【乳用雌牛の目標】（ホルスタイン種）
- 1頭当たり乳量の向上：
  8，100kg → 8，500kg ～9，000kg
- 現在の乳成分の維持：　±0
- 初産月齢の早期化：
  25か月 → 24か月

乳量の変化の小さい泌乳持続性の高い牛づくりを通じ、生涯生産性を向上させます。



遺伝子レベルで能力を解析し、乳牛の改良を加速化させます。



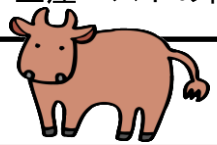
放牧など粗飼料を効率的に利用できる牛群づくりを進めます。

※牛群検定とは、乳量・乳成分率などの搾乳牛の個体データを集計・分析するもので、酪農家にとって、飼養・衛生・繁殖管理や牛群の能力向上などの酪農経営の改善に役立っています。

肉用牛の改良増殖目標　－ 10年後を目指して　和牛の強みが発揮できる牛づくりを進めます－

「農場から食卓まで」を支える肉牛づくり

- 適度な脂肪交雑の牛肉など、多様な消費者のニーズにも応えた牛づくりを進めます。
- １年１産の実現を目指して和牛の子牛をしっかり増やします。
- 収益性に配慮しながら肥育期間の短縮を進め、生産コストの低減を図ります。



多様な消費者ニーズに応じたおいしい牛肉を供給します。

適度な脂肪交雑の和牛づくり

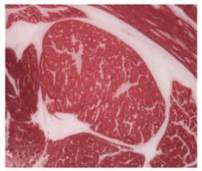
「おいしさ」の指標づくり

- 早期に十分な体重に達し、適度な脂肪交雑が入る和牛をつくりながら、肥育期間の短縮を図るとともに、「オレイン酸」や「アミノ酸」などの「おいしさ」の指標化も進めます。

和牛を代表する黒毛和種

粗飼料の利用効率が高い褐毛和種

牛肉の「おいしさ」



［アミノ酸組成］
［きめ］
［締まり］

→ 指標化

産肉能力の高い、特色のある牛づくりを進めます。

牛肉は良質な動物性たんぱく質の供給源であり、すき焼きや牛丼など日本食に欠かすことのできない食材です。特に和牛は我が国固有の品種です。飼料効率や増体性の向上を図り、効率的な生産を進めていきます。

- 牛肉の1人当たり年間消費量は約6kg、国内消費量の約40%を国内の肉用牛農家が支えています。
- 和牛肉は、国内で生産される牛肉の約46%を占めるなど、我が国の牛肉供給を支えています。また、和牛肉は海外からも注目されています。

肉用牛の能力を十分に発揮させるため、１年１産に向けたICT（情報通信技術）などの新技術の活用による繁殖管理の徹底、家畜の快適性に配慮した飼養管理（アニマルウエルフェア）などの取組が重要です。また、特長ある系統の維持改良による遺伝的多様性の確保も必要です。

【種雄牛の目標】〔黒毛和種〕
- 日齢枝肉重量（遺伝的能力）の向上
  72ｇ増〈対平成18年度比〉
- 脂肪交雑（育種価）の維持：±０〈対平成18年度比〉
- 肥育期間の短縮と増体性の向上
  29か月→24～26か月、475kg→480kg（枝肉重量）

【繁殖雌牛の目標】
- 初産月齢の早期化
  24.5ヶ月　→　23.5ヶ月
- 分娩間隔の改善
  13.3ヶ月　→　12.5ヶ月